

米 国 U.S.A.

■スポーツ業界のカギを握る女性消費者■

「女性の間では、男性以上にスポーツ志向が高い」スポーツとレジャー調査を専門とするアメリカン・スポーツ・データ社が、先ごろこんな結果を発表しました。

同社が、スポーツへ取り組む姿勢や種目の男女の比率を調べたところ、サイクリングを始めた人の10人中7人、ウエイト・トレーニングでは、5人中3人が女性でした。また自分の生活の中で、ジョギングやランニングの時間を組み込んでいる人の半数以上に当たる57%、そしてエアロビクスに関しては、なんと85%約二千万人が女性というのです。

この傾向は80年代に人気が出てきたスポーツだけでなく、伝統的に男性のためのスポーツといわれてきたゴルフ、バスケットボール、ラケットボール、そしてソフトボールにまで広がってきました。例えばゴルフ。全体から見れば、女性愛好者はわずか26%ですが、ここ数年来ゴルフを始めたという人の半数近くが、やはり女性です。スポーツ市場では、すでにこうした女性消費者の動きが商品の売り上げに反映しており、一昨年のアスレチック・シューズ総売上数2億足のうち、40%は女性購買者でした。女性を狙え——これがスポーツ業界の合い言葉です。

メ 国 U.S.R.

■「女子体操界は子供ばかり」への反論■

ソ連の女子体操選手は小柄で子供のような体つきをしているため、西側諸国では時々、彼女たちが薬の力で成長を止められているのではないかといった話がまことしやかに語られることがあります。これについて先ごろ、元ソ連女子体操チーム監督のラリサ・ラティニナ（メルボルン五輪とローマ五輪で個人総合優勝）は、ノーボスチ通信を通じて次のように話しています。「優秀な選手を育てるスポーツ学校（日本では「優秀な選手を育てるスポーツ学校（日本ではいけばスポーツクラブ）」はどこも、医師の厳しい診断を受けさせてから子供を入学させ、その後も年に二度は全生徒のメディカルチェックをしています。体操選手は少女ばかりといわれますが、16歳の世界チャンピオン、オリガ・モステバノワはここ数年間で身長が12センチ伸び、女性らしい体つきになっています。私が監督をしている時、超難度の技を練習している選手たちを見た人から「あなたは、少女たちから母親になる能力を奪っている」と非難されたこともあります。しかしオリガ・コルブトやネリー・キムなどかつてのチャンピオンも、今では立派な母親になっています。大切なのは競技の内容自体が変化している事実を認め、新しい体操になじむことではないでしょうか。

東 欧 East Europe

■イデオロギーを越える女性パワー■

たくましい女性、の出現は、今や世界的な傾向のようです。この春には、バワフルウーマンのための2つの大会が、東ヨーロッパで開かれました。

その一つは、ハンガリーのブダペストで行われた初の女子重量挙げ国際大会。これは男子の大会の合い間に開かれ、米、中国など5カ国23選手が参加しました。女子の重量挙げといえば、日本ではバレーボールの全日本チームなどが、軽いバーベルを使って筋力トレーニングをしています。しかし、それはあくまでもトレーニングの一環です。

重量挙げの女子だけの大会は、1981年に米国で行われた国内大会が最初で、昨年、国際重量挙げ連盟（IWF）が女子競技を公認したばかり。ルールは男子と同じで、今回は44歳から82歳まで8階級に分かれて力を競いました。男子にくらべ記録はまだみだですが、大会を見学した日本人関係者によれば、技術的には男子に迫る選手もあり、大いに楽しみとかが、そして、1カ月後には、ポーランドの首都ワルシャワで、欧州ボディビル選手権。女子の部ではポーランドの筋肉ウーマンも善戦しました。西も東も、まさに、強い女の時代到来!